

§3-3. まとめ

1. 色彩と香りの調和による心理的効果

§3-1では、印象評定、気分評定の2つの心理指標を用いた。§3-2では、精神的ストレスの指標として唾液中クロモグラニン A (CgA) に着目し、内田クレペリン精神検査によるストレスの回復度を調和条件、不調和条件で比較した。2つの実験で共通していたのは、レモン+vY (調和条件)、レモン+dkB (不調和条件) の刺激であった。心理的指標によって、印象評定結果では、調和条件の方が、<MILD>因子、<CLEAR>因子共に得点が高かった。また、気分評定においては、調和条件の方が<POSITIVE>因子の得点が大幅に上昇した。CgAを指標とした場合、調和条件の方が、よりストレス回復を促す傾向が認められた。したがって、レモンの香りは調和性の高いビビッドイエローと組み合わせると、加算的な相乗効果が得られるが両実験から示唆されたと考えられる。そして、本研究で採用した刺激の結果を総合的に眺めると、調和ペアでは色彩と香りの性質の加算的相乗効果が得られ、不調和条件では錯乱が生じる可能性を示唆する結果が得られた。したがって、本実験の設定において、色彩と香りの組み合わせによる心理的効果が確認された。また、第2章で検討した色彩と香りの調和性の妥当性が示唆されたと思われる。

2. 色彩と香りの調和による心理的効果が生じるメカニズム

本実験の設定では、まず、カラーパネル内に着席し、周辺視を含む視野の全体が任意の色で覆われる。すなわち、まず色彩刺激が知覚され、その印象によって、気分も含めた心理的な「構え」(set)が生起すると考えられる。それに対して、期待する香りが、類似の特徴を持つ調和香であり、期待とは異なる香りが不調和香と思われる。そして前者が提示された場合は、香りの認知がスムーズで、印象評定、気分評定が安定することで相乗的効果が得られたと考えられる。逆に、後者の場合、色彩の性質に引き寄せられることで、香りの認知に少なからず錯乱が発生し、結果として香りと色彩の持つ特徴が相殺されたり、不快感が生じやすくなる可能性が推察される。

3. 本章の結論

本章の結論を以下にまとめた。

- 1) 任意の色空間内で香りを嗅ぐという設定における色彩と香りの調和による効果は、主観的心理指標を用いた場合でも、唾液中クロモグラニン A (CgA) を指標とした場合でも、認められた。
- 2) カラーパネル内に着席し、周辺視を含む視野の全体が任意の色で覆われることにより、心理的な「構え」(set) が生起すると思われる。
- 3) 「構え」に対して、期待する香りを嗅いだ場合 (調和条件)、色彩と香りの特徴が、相乗的により高められる傾向にあった。
- 4) 「構え」に対して、期待とは異なる香りを嗅いだ場合 (不調和条件)、色彩、香りの特徴が相殺されたり、場合によっては気分的な不快感が生じる可能性が示唆された。